

41347

教科書文庫

4
810
31-1914
<del>20000</del> 23618

200030

2708

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM. Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

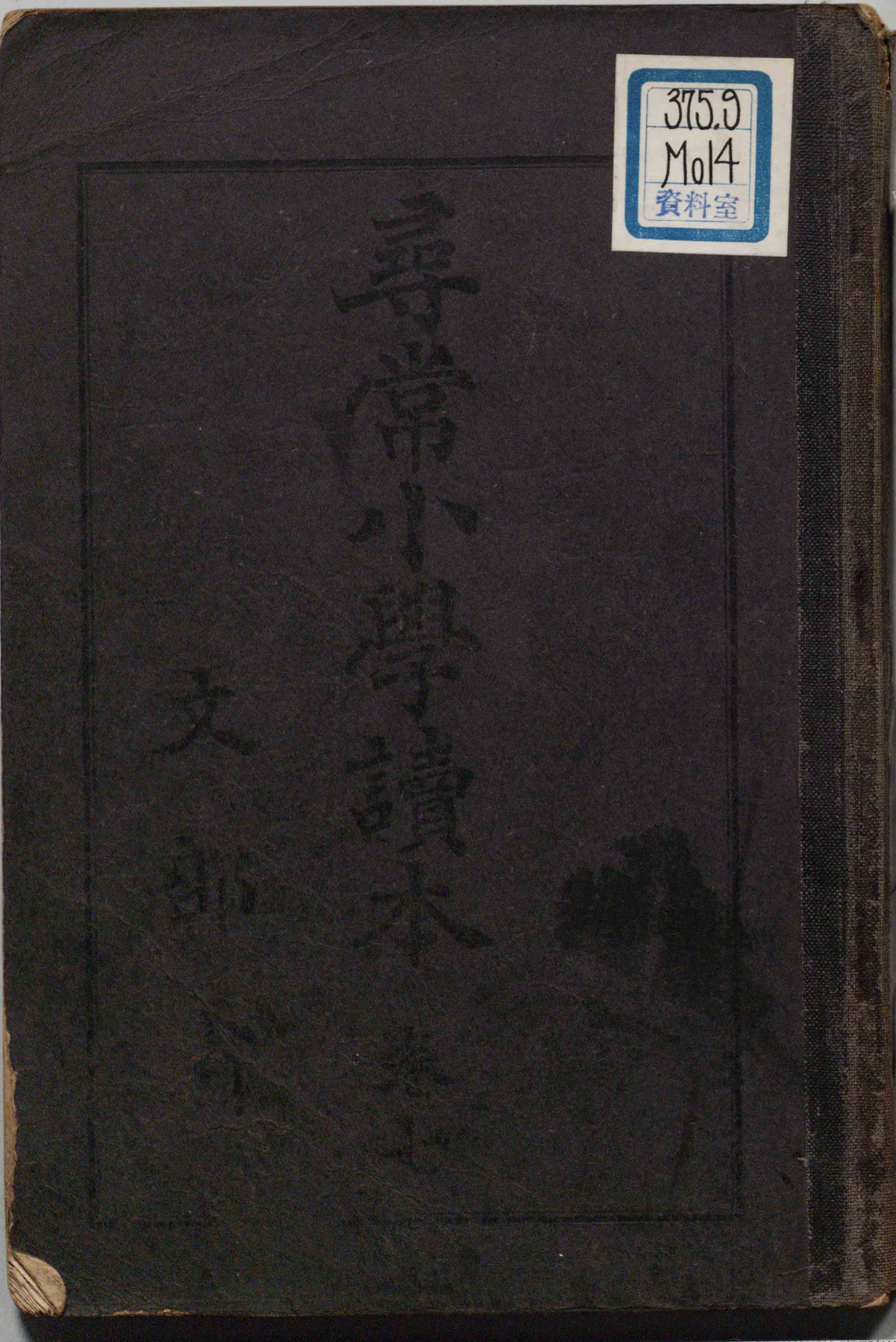
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM. Kodak



375.9  
Mol4  
資料室

學堂



資料室

375.1  
M014

尋常小學讀本

卷七

文  
部  
省



もくろく

第一	楠木正行 <small>クスキマサツラ</small>	(一)	一	第十四	西洋紙ト日本紙	四十六
第二	楠木正行	(二)	五	第十五	郵便の話	五十
第三	ゐなかの四季		九	第十六	東京見物	五十四
第四	商業問答		十二	第十七	東京見物	五十七
第五	問合の手紙		十五	第十八	犬	五十九
第六	豆の一族		十九	第十九	水とからだ	六十三
第七	増保 <small>マサホ</small> 己 <small>キ</small> 一 <small>イチ</small>		二十二	第二十	桃をおくる手紙	六十六
第八	手ノハタ <small>テノハタ</small>		二十五	第二十一	海ノ生物	六十九
第九	蠶		二十八	第二十二	海ノ生物	七十四
第十	やき物 <small>ヤキモノ</small> とぬり物		三十四	第二十三	何事も精神	七十八
第十一	勸工場		三十六	第二十四	航海の話	八十
第十二	山内 <small>ヤマウチ</small> 一豊 <small>イツヒヨ</small> の妻		三十九	第二十五	航海の話	八十四
第十三	家の紋		四十四	第二十六	廣瀬中佐	八十九



尋七

戦 歳 場 我 生

第一 楠木正行 (一)

楠木正行ハ正成マサシゲノ子ニシテ、父ニオトラヌ忠義ノ士ナリ。正成ノ戦死セシハ正行ガ十一歳ノ時ニシテ、ソノ折父トトモニ戦場ニ出デントセシガ、正成ハ道ニテサトスヤウ、

我聞ク、シ、ハ子ヲ生メバ、三日ニシテコレヲ谷ソコヘオトシテ、ソノカヲタメストイフ。ナンデハ年ステ二十歳ヲコエタリ。ヨク父ノ言フコトヲ聞分ケヨ。コノ度ノ戦、敵ハ



汝

起

孝行

大ゼイニシテ、  
 味方ハ小ゼイ  
 ナリ。我が生き  
 テフタ、ビ汝  
 ヲ見ンコトハ  
 カタカルベシ。我が死ニタル後モ、一門ノ者  
 一人ニテモ生き残りテアル間ハ、忠義ノ兵  
 ヲ起シテ、天皇ノ御タメニツクスベシ。汝ノ  
 孝行コレニスギタルコトナシ。



尋七

室

ト、ネンゴロニ言ヒフクメテ、國ヘカヘシタリ。  
 正成ハタシテ戦死シテ、ソノクビハ家ニ送ラ  
 レタリ。正行ハコレヲ見テ、カナシサノアマリ、  
 ツト立チテ別室ニ行キタリ。母アヤシミテ、ソ  
 ノ室ヲウカミフニ、正行ハ父ノカタミノ刀ヲ  
 抜キテ、今ニモハラヲ切ラントス。母ハ走りヨ  
 リテ、正行ノウデヲオサヘ、  
 汝ヲサナクトモ、父ノ子ナレバ、コレホドノ  
 ワケノ分ラヌコトハアルマジヨク〜考

三

大人  
賊

教

へ見ヨ。父ノ汝ヲカヘシタマヒシハ、汝ノヲ  
サナクシテ死ヌルヲカナシミタマヒテニ  
アラズ。大人トナリテ、君ノ御タメニ忠義ノ  
兵ヲ起シテ、賊ヲ平ゲシメントナリ。ミヅカ  
ラ御コトバヲウケタマハリ來リテ我ニツ  
ゲタルヲ、汝ハ早クモワスレタルカ。カクテ  
ハ君ノ御用ニ立ツベシトモオボエズ。  
トテ、泣クくイマシメタリ。正行大イニカン  
ジテ、コレヨリ後ハ父ト母トノ教ヲ守リテ、一

居  
氏  
万

日モワスル、コトナカリキ。

第二 楠木正行 (二)

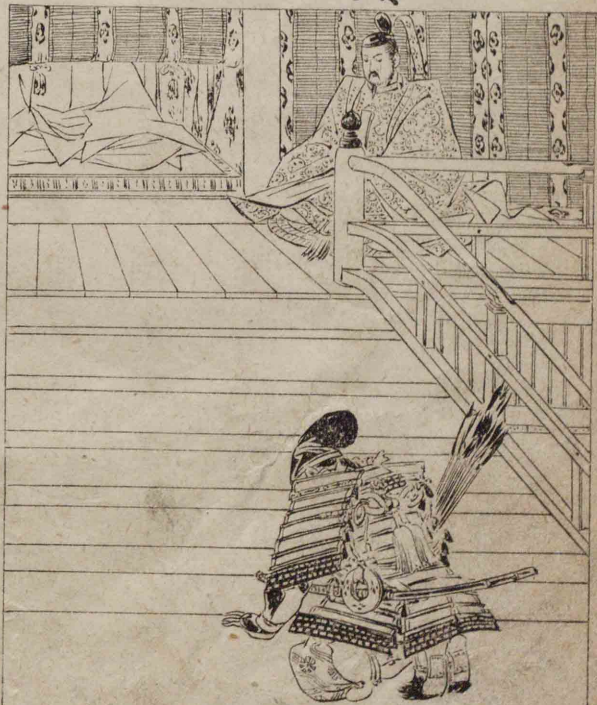
正成戦死シテ後ハ、敵ノイキホヒマスく強  
ク、天皇ハ吉野山ノカリノ皇居ニウツリタマ  
ヘリ。楠木氏ハソノ後ツネニ皇居ヲ守リテ、敵  
ト戦ヒシガ、アル年敵ノ大將高師直六万人ノ  
大兵ヲヒキキテ來リ攻ム。正行コノ度ハサイ  
ゴノ合戦セントテ、皇居ニマキリテ申シ上グ  
ルヤウ、

臣

朝

及

父正成ノ戦死  
 セシ時、臣ハワ  
 ジカニ十一歳  
 父ハ臣ヲ合戦  
 ノ場ニモトモ  
 ナハズ、残リタ  
 ル一門ノモノドモヲ集メテ、朝敵ヲホロボ  
 セト申シ、残シタリ。シカルニ正行スデニ男  
 盛リニ及ベリ。モシ病ニカ、リテ早く死ナ



不

顔

召

バ、君ノ御タメニハ不忠ノ臣トナリ、父ノタ  
 メニハ不孝ノ子トナルベシ。コノ度ノ合戦  
 ニハ、師直ラノクビヲ正行ガ取ルカ、正行ラ  
 ガクビヲカレラニ取ラスルカ、ニツノ中ノ  
 一ツト思ヘバ、今一度天顔ヲヲガミテマキ  
 リタシ。  
 ト、涙ナガラニ申シ上ゲタリ。天皇ハコレヲ聞  
 キ、ミスヲ高クマキ上ゲサセ、正行ヲ近ク召シ  
 タマヒテ、

「親子二代相ツマイテノ忠義カンズルニア  
 マリアリ。コノ度ノ合戦サダメテナンギナ  
 ルベケレド、進ムモ退クモ時ヲ見テスベシ。  
 フカク汝ヲタノミニ思フゾ。」  
 トオホセ出サレタリ。正行ハソレヨリ戦場ニ  
 向ヒ、花々シク戦ヒテ、一族ノ人々トトモニ戦  
 死ヲトゲタリ。コレ正成戦死ノ後十三年目ニ  
 シテ、正行ガ二十三歳ノ時ナリキ。正行ノ如キ  
 ハマコトニ忠孝ニツノ道ヲ全ウシタル武士

ニシテ、國民ノ手本トイフベシ。  
 第三 春 夏 秋 冬 四季

(一)

道をはさんではた一面に、

麥はほが出る、菜は花盛り。

眠る蝶々、とび立つひばり、

吹くや春風たもとも軽く、

あちらこちらに桑つむをとめ、

日まし／＼にはるごも太る。

夏

(二)

ならぶすげがさ涼しいこゑで、

歌ひながらにうゑ行くさなへ。

ながい夏の日いつしか暮れて、

うゑる手先に月かげ動く。

かへる道々あと見かへれば、

葉末々々に夜つゆが光る。

(三)

二百十日も事なくすんで、

秋

村の祭のたいこがひびく。

稲は實がいる、日よりはつゞく、

刈つて、ひろげて、日にかわかして、

米にこなして、俵につめて、

家内そろつて、ゑ顔にゑ顔。

(四)

松を火にたくるろりのそばで、

夜はよもやま話がはずむ。

母がてぎはの大こんなます、



降

問答

賣

現

これがあるなかの年こしぎかな。  
たなのもちひくねずみの音も、

ふけてのきばに雪降積る。

第四 商業問答

商賣上でげんきんといひかけといふのは何の事ですか。

品物と引きかへに代金を受取るのが現金で、品物を渡しておいて、後になつて代金を受取るのがかけです。

直段

卸

かけとかけねとは同じですか。

それは全くちがひます。ねぎられたら引く積りで、高いいふ直段がかけねです。たとへば十五錢で賣つてよいものを二十錢といふやうなものです。正直な商人はかけねなどはいひません。

小賣と卸賣とはどちらがひますか。

小賣といふのは商人から品物を使ふ人へ小口に賣渡すことです。小賣をする商人を

小賣商人といひます。卸賣といふのは品物をたくさん持つてゐて、小賣商人へ大口に賣渡すことで、卸賣をするものを卸賣商人といひます。

問屋といふのは何の事ですか。

問屋といふのは他人からたのまれて、口錢を取つて、自分の名で大口に品物を賣つたり買つたりする店のことです。たとへばごふく問屋といふのは、織物を賣りたいとい

ふ人にたのまれて、それをほかへ賣渡してやり、又織物を買ひたいといふ人にたのまれて、それをほかから買取つてやる店のこととです。しかし卸賣商人で、問屋をしてゐる場合がたくさんあります。

第五 問合の手紙

急に商用が出来て、明朝六時の汽車で東京へ立ちます。用事は四五日ですむはずですが、十日

急

宿

ばかりはあちらに居ます。急ぎ  
ますのでうかゞひませんが、何  
かあちらでととのへて来る物  
がございますなら、御忍んりよ  
なくおつしやつて下さい。宿は  
いつもの所です。

五月一日

高橋忠一

鈴木愛吉様

同じくへんじ

たのみの丈

存 節

西洋

ぶじお着のことと存じます。こ  
のよい時節に東京へお上りは  
おうらやましい事でございます  
す。おほせにあまえて申し上げ  
ます。種物屋から西洋西瓜の  
種を三色ばかり買つて来てい  
たゞきたうございます。西洋西  
瓜には色々あるさうでござい  
ますが、なるべく大きくてうま

い實のなるやうなのを願ひ  
 申します。又母がかねぐめづ  
 らしい草花をほしいくと申  
 して居りますから、おてかずで  
 も、これも二三種買つて来てい  
 たゞきたうございます。花の種  
 類は何でもよろしうございま  
 す。

五月四日

鈴木愛吉

高橋忠一様

第六 豆の一族

にはの藤の花が咲いて、風が吹く度にむらさ  
 きのふさが動いてゐる。畠のゑんどうがかき  
 の外からこゑをかけて、

「とくに申し上げようと思つてゐました。あ  
 なたと私は親類ださうでございますから、  
 どうかこれからお心安く願ひます。」

といふ。藤は

似

「私はちつとも存じ  
 ませんでした。どう  
 いふわけでおたが  
 ひに親類の間から  
 でございますか。」  
 と問へば、魚んどうのいふに、  
 「あなたと私は大そう似てゐ  
 るではありませんか。第一あなたにも私に  
 も豆がなります。葉は羽形で、二枚づつ向ひ



尋七

尋七

小豆

承

合つてゐますし、花は同じく蝶の形をして  
 ります。大豆・小豆さ、げそら豆・なた豆など  
 はすべて私どもの親類です。豆類にはつる  
 になるのとならぬのがあります。」  
 藤「さうでございますか、はじめて承りました。  
 私はこんな大きなりをしてゐますが、畠  
 の藤豆さんとはちがつて、私の豆はたべら  
 れません。まことにおはづかしい次第です。」  
 魚んどう「あなたはそのお美しい花だけでたくさ

二十

二十一

んでございます。あなたほどの大きな花ぶ  
 さは見たことがございません。私どもの親  
 類で、小さくてかはいらしいのは、あの春の  
 野に咲くれんげ草でございませう。」

第七

塙保己一

目ハ見ユレドモ、字ノ讀メザル人ヲアキメク  
 ラトイフ。シカルニ目ハ見エズシテ、大學者ト  
 ナリシ人アリ、塙保己一コレナリ。  
 保己一ハ五歳ノ時メクラトナリシガ、人ニ書



物ヲ讀マセ、コレヲ聞キテ、一心ニ勉強セシカ  
 バ、後ニハ名高キ學者トナリ、多クノ書物ヲア  
 ラハセリ。保己一ノ家ハ今  
 ノ東京、ソノコロノ江戸ノ  
 番町ニアリ、多クノデシ保  
 己一ニツキテ學ビシカバ、  
 時ノ人

番町デ目アキ目クラニ  
 物ヲキ、

トイヒタリトイフ。

アル夜弟子ヲ集メテ、書物ノ講義ヲセシ時、風ニハカニ吹キテ、トモシビキエタリ。保己一ハソレトモ知ラズ、講義ヲツゞケタレバ、弟子ドモハ、

「先生、少シオ待チ下サイマセ。今風デアカリガ消エマシタ。」

トイフ。保己一ハ笑ヒテ、

「サテ〜、目アキトイフモノハ不自由ナモ

ノダ。

トイヒタリトゾ。

第八 手ノハタラキ

取ル・拾フ・握ル・持ツ・投ゲルナドハ皆手ノハタラキデス。モシ手ガナカツタラ、ドノクラ申不自由デセウ。ハシヲ持ツコトモ出来マセン。オビヲムスブコトモ出来マセン。カユイ所ヲカクコトモ、イタイトコロヲサスルコトモ出来マセン。大工ガ家ヲタテルノモ、左官ガカベヲ

握るはたらし

農夫

程

足

ヌルノモ、センドウガ船ヲコグノモ、農夫ガ田  
 ヲタガヤシ、畠ヲツクルノモ、皆手デスルノデ  
 ス。色々ナキカイガアツテモ、ソレヲハタラカ  
 セルノハヤハリ手デス。  
 手ハスベテノ仕事ノモトデス。イソガシイ時  
 ニ手ノ足りナイトイフノハ、ハタラク人ノ少  
 イトイフコトデス。  
 家デモ國デモ手ヲヨクハタラカセル人が多  
 ケレバ多イ程盛ニナリマス。フトコロ手バカ

感

音

下手

リシテキル人が多ケレバ多イ程オトロヘマ  
 ス。  
 筆一本デ美シイエヲカイタリ、ノミ一ツデ見  
 事ナホリ物ヲコシラヘタリシテ、人ヲ感心サ  
 セルノモ、手ノハタラキデセウ。ドンナガクキ  
 ガアツテモ、手がナカツタラ、オモシロイ音ヲ  
 出スコトハ出来マスマイ。何事ニヨラス手ノ  
 ハタラキノヨイノヲ上手トイヒ、手ノハタラ  
 キノワルイノヲ下手トイヒマス。



サルニハ手ノハタラキヲスルモノガ四本アリマス。シカシ人ノヤウニ色々ナ物ヲコシラヘルコトハ出来マセン。コレハチエガ少イカラデス。手バカリ動カシテモ、チエガナケレバ何ノ役ニモ立チマセン。

第九 蠶

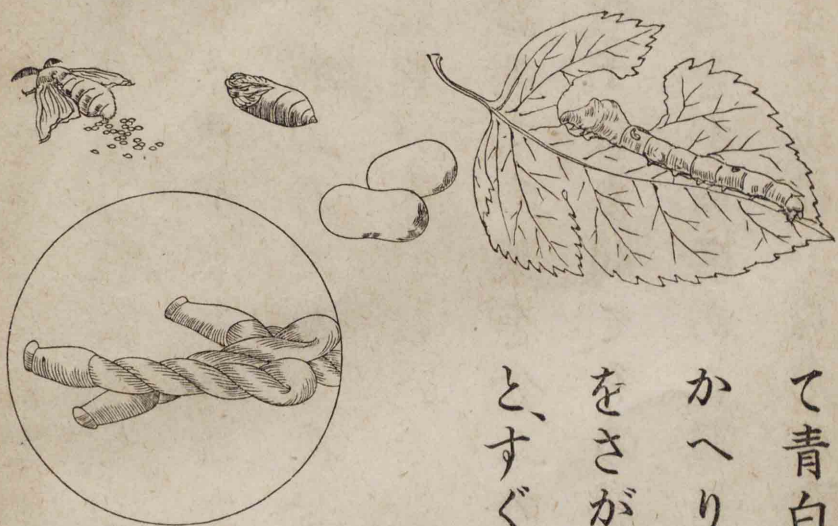
一匹の蠶の口から出る絲をのばして見ると、五六町もあるといふことである。この長い絲を出す蟲が百匹もなければ、木綿はゞ一尺の

蠶 絲

卵

絹織物を織る絹絲は出来ない。蠶をかつて絹絲を取り、絹絲を織つて絹織物にするまでには、大それた手間がかかる。それを考へると、絹織物のあたひの高いのも、けつしてむりではない。

卵からかへつたばかりの蠶はあり程の大きさで、長さは一分ばかりしかない。けれども一月ばかりの内には、皆さんの小指程の大きさになり、色もはじめは黒いが、だんくくかはつ



て青白くなる。

かへりたてから、しきりに食物をさがしてゐて、桑の葉をやると、すぐ食ひはじめる。小さい時

分はやはらかな葉をこまかく切つてやるが、大きくなる、枝のまゝやる。食つてしまふと、頭をうごかして、しきりに桑

の葉をたづねる。大きな蠶がたくさんで桑の葉を食ふ時には、木の葉に雨が降りかゝるやうな音がする。そのころになると、二万匹の蠶をかふのに、人一人付き、りで、眠るひまもない程いそがしい。

蠶が桑の葉を食ふのは、およそ二十五日から四十日の間で、その間に一日か二日づつ眠ることが四度ある。眠る度に皮をぬぎかへて、しまひにはからだすがすきとほつて見える。

包

この時木の枝やわらなどで作つたまぶしへ  
 うつしてやると、口から美しい絲を出して、か  
 らだを包む。それが二三日の内に出来上つて  
 繭まゆになる。蠶の口の中には小さいくだが一つ  
 ある。そのくだから出すねばつたしるが外へ  
 出ると、すぐにかわいて絲になるのである。  
 繭の中の蠶はさなぎとなる。蠶が繭を作つて  
 から二十日あまりたつと、さなぎが蝶のやう  
 な形になつて、繭を破つて出て来る。これを蠶

破

の蛾がといふ。

産

蛾が出ると、絲が取れないから、まだ出ない内  
 にむして、さなぎをころしておいて、それから  
 繭をにて、絲を取るのである。蛾は繭から出る  
 と、やがて卵を産んで、間もなく死んでしまふ  
 から、出て来ると、すぐに紙の上において卵を  
 産みつけさせる。その卵を産みつけさせた紙  
 を蠶卵紙といふ。一匹でおよそ四五百程の卵  
 を産む。

蠶卵紙

蠶をかふのは春と夏と秋の三度で、春ご夏ご秋ごといふ名がある。わが國は昔から養蠶の盛な國で、生絲は外國へ賣出す品物の第一である。

第十 やき物とぬり物

茶わん・土びん・皿はちなどはやき物にして、ぜん・わん・ぼん・重箱などはぬり物なり。やき物をつくるには、土又は石のこをねりかためてかわかし、かまどに入れて焼く。かくし

て出來たるものをすやきといふ。我らのつねに用ふる茶わん・皿はちの類は、このすやきにうはぐすりをかけて、ふたゝび焼きたるものなり。花鳥・山水・人物などのもやうは、うはぐすりをかくる前にゑがく。

塗物はくりたる木又は組合せたる木・竹又紙などにうるしを塗りてつくる。塗物に黄赤黒青などさまざまの色あるは、皆うるしに色を着けたるなり。うるしの上に金又は銀にてゑ

がきたるものをまき魚といふ。

第十一 勸工場

町ノニギヤカナ所ニ新シイ勸工場が出来タ。マヅ入口ヲハイルト、右ノ方ニハ四・ハチ・茶ワ  
ンナドノ焼物ヲ賣ル店ガアリ、左ノ方ニハゼ  
ン・ワン・ハシナドノ塗物ヲ賣ル店ガアル。筆・墨  
紙ナドノ店クシ・カンザシナドノ店ヲ見テ、右  
へ折レルト、ソコニ繪草紙屋・ゲタ屋・オモチヤ  
屋ナドガナランデキル。ドノ店ニモ品物がキ



レイニナラベテアル。

店ハ兩ガハニアツテ、マン中  
ノ道ハセマイガ、人ハ皆前へ  
前へト進ンデ行ツテ、後へハ  
引キカヘサナイカラ、通り道  
ノセマイ割合ニハコンザツ  
シナイ。  
色々ナ店ノ前ヲ通ツテ、左へ  
折レタリ、右へ折レタリスル

荒

札

ト、知ラズくニ出口へ出テ來ル。出口ニ近イ  
 所ニハ、着物羽織ナドヲ賣ツテキル店ガアリ、  
 出口ニハ鍋釜鐵ビン火バシナドヲ賣ル金物  
 屋ト、ヲケタラヒザルナドヲ賣ル荒物屋ガア  
 ル。日用品ナラバ、マヅ何デモアルトイツテヨ  
 ロシイ。品物ハ皆正札附デ、カケ直ガナイ。店ニ  
 ハ番人が居テ、買ハウト思フ物ハスグニ買ヘ  
 ル。何モ買フモノガナケレバ、ソノマ、カヘツ  
 テモヨイ。又一ドニ色々ナ物ヲ買集メタイ時

便利

妻

ニハ、一トコロデスムカラ便利デアル。

第十二 山内一豊かつとよの妻

山内一豊が織田おだ信長のぶながのけらいになつたばかりのころ、大そうよい馬を賣りに來た者があ  
 りました。これを見た人は皆ほしいとは思ひ  
 ましたが、何分にも直が高いので、誰一人買は  
 うといふ者がありません。馬の主は馬を引い  
 てかへらうとしました。

一豊もほしくて、たまらないから、家へ

かへつて、

「あ、金がない程残念なことはない。武士としてにはあのくらゐな馬をもつて見たい。」

と思はずひとり言をいひました。妻はこれを知りて、夫に向つて、

「その馬の直はいか程でございます。」

「金十兩。」

妻は立つて、鏡箱の中から十兩の金を出して、  
「どうぞこれでその馬をおもとめあそばし

ませ。」

一豊はおどろいて、

「これは又どうした金か。これまで貧しい暮しをしてゐるのに、こんな大金を持つてゐるなら、なぜあると一言いはなかつた。」

「さやうでございます。このお金は私がこちらへ来る時、夫の一大事の折に使へ。」と申



して、父の渡してくれた金でございませう。人の話によりませうと、御主人織田様には、近いうちに京都で馬ぞろへをなさいませうとのこと。さだめて皆様は御じまんの馬に乗つてお集りのこととございませう。あなた様にも、その折にはよい馬にめして、主人のお目にとまるやうになされるのが大事と考へまして、今日このお金を出しましたのでございませう。」

## 禮

一豊は妻に禮をのべて、その馬をもとめました。やがて馬ぞろへの日となつて、一豊の馬ははたして信長の目にとまつて、

## 馬

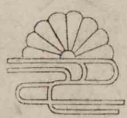
「あゝ、よい馬、名馬々々。誰の馬か。」とたづねました。けらいのものが、「これは一豊の馬でございませう。」といひますと、

「日ごろ貧しい暮らしをしてゐる一豊が、よくもかういふよい馬を買ひもとめた。見上げ



た志のものりつはな武士。  
と、信長は大そう感心して、これが一豊の出世  
のもとになつたといふことであります。

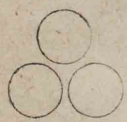
第十三 家の紋



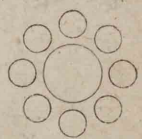
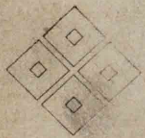
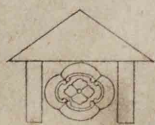
おほよそ家の紋どころ、  
いふもかしこし、菊と桐。



楠木くすのぎ父子の菊水は、  
忠義のかをりなほ高し。



いほりもかうは孝行の



曾我そが兄弟に知られたり。

二つどもゑに三つどもゑ、

三つ星・四つ目・九曜星、

梅ばち・櫻たちばなや、

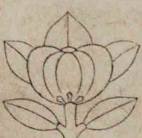
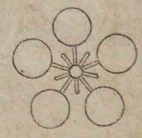
三がい松にさゝの雪、

上りあが下りさがの藤の紋、

さてはたかの羽つるの丸、

家の氏の名多ければ、

紋の數々かぎりなし。



第十四 西洋紙ト日本紙

西洋紙ガ日本紙ニ向ツテ、

世

世ノ中ガヒラケテカラ、ドウモ君夕チノ仲

間ヨリモ、僕ラノ仲間ノ方ガヨケイニ用ヒ

ラレルヤウニナツタカト思フ。マヅ毎日ノ

新聞

新聞ハ西洋紙デアルシ、書物モ近ゴロハ大

テイ西洋紙デコシラヘルヤウニナツタ。

トイフト、日本紙ハ

マヅコノザシキヲ見渡シテモ、コノタクサ

障

ンノ障子ハ皆僕ラノ仲間デハツテアルデ  
ハナイカ。コ、ニアル扇モウチハモヤハリ

サウダ。

トイヒマス。西洋紙ハ

君ラハ表ダケシカ役ニ立タナイガ、僕ラハ

裏表トモニ使ハレル。便利ニオイテハトテ

モカナフマイ。

トイヒマス。日本紙ハ

イヤ、君ラハ破レ易クテ、少シモ強ミト

易

等

イフモノガナイ。日本紙ハコヨリニシテ物  
ヲシバルコトガ出来ル。モトユヒヤ水引ノ  
ヤウナ、アンナ丈夫ナ物ハ日本紙デナケレ  
バ出来ナイ。

トジマンシマス。西洋紙ハナホマケズニ、

君等ハ水ニヌレルト、スグニベタ〜ニナ  
ルガ、僕等ハ少シグラキ水ニヌレテモ、裏へ  
ハ通ラナイ。

日本紙ハ笑ツテ、

印

僕等ノ仲間ニハカラカサニナツタリ、合羽  
ニナツタリスルモノガアル。水ニヌレルグ  
ラキハ何デモナイコトダ。

西洋紙ハ又

葉書ヤ切手ヤ印紙ナドハ皆僕等ノ仲間ダ  
ゾ。

トイヒマス。ト、日本紙ハ神ダナヲ指サシテ、  
ソナニイバツテモ、アノ神ダナノ御札ヤ  
ゴヘイニハナレマイ。

郵便

トイヒマシタ。

第十五 郵便の話

「松村さん、郵便。」

とよびて、配達人は入口に立ちたり。お花は

「はい。」

と答へて受取らんとせしが、配達人は

「おかあさんをよんで下さい。」

といふ。母は出で来りて、やがて六錢をはらひて、一通の手紙を受取りたり。

配達

通

お花はあやしみて、

「これにはちやんと三錢の切手がはつてあるのになぜまたおあしを拂ふのですか。」

と問へり。母は

「手紙は四匁までは三錢で、四匁より少しでも重いと、その倍の六錢だけ切手をはらなければなりません。この手紙は四匁より重いのに、差出人が三錢しかはつておきません。つまり三錢だけが不足です。不足の時に

拂

差



は、不足の分の倍だけ拂はなければ、その手紙を受取ることには出来ないのです。」

と教へたり。お花は

「小包郵便でも四匁までが三錢ですか。」

と問ふに、母は

「い、え、ちがひます。小包郵便は一貫六百匁までには送れるのですが、近い所なら四錢でよいのです。遠い所でも二百匁までは八錢で、その上は目方によつてちがひます。又新

寫真

賃 今

聞は二十匁までが五厘、書物や寫眞の類は三十匁まで二錢で、これもたゞの手紙などよりはよほど安いのです。昔はひきやくといふものがあつて、手紙や品物を配達しました。が、これは今日のやうに早くはとゞかず、賃錢も高かつたのです。今では切手をはつて出しさへすれば、どんを遠い所へもとどきますから、大そう便利ですよ。」

第十六 東京見物

(一)

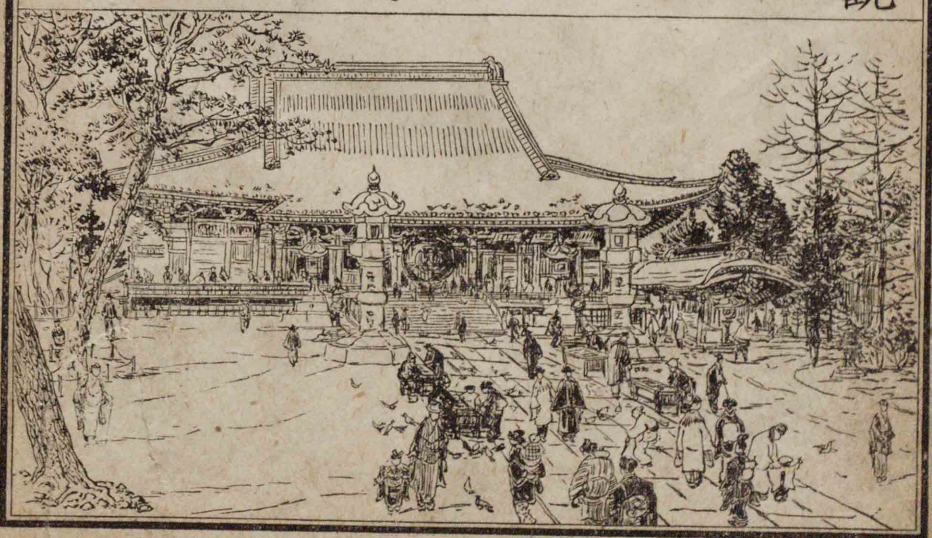
新橋停車場ヲ出デテ、上野行ノ電車ニ乗ル。銀座<sup>ザ</sup>通ノニギハシサマヅ目ヲオドロカス。十五分ホドニテ日本橋ニイタル。右ノ方ハ魚市場ニテ、賣買ノコエカマビスシ。ソレヨリ二十分アマリニテ上野公園ニ着ク。上野公園ニハ廣キ動物園アリテ、種々ノメヅラシキ動物ヲ集メタリ。ソノ他博物館パノラマナドアリ。コ、ニハ櫻ノ木多シ。春ノ花盛リイカニ美シカラ

尋七



ン。櫻ガ岡ヨリ見下セバ、見ユルカギリハ皆人家ナリ。サレドモコ、ニテ見ユルハ東京ノ三分ノ一ニモ足ラズトイフ。浅草<sup>アサ</sup>ノ觀音堂モ東ノ方ニ見ユ。上野ノ山ヲ下リテ、浅草行ノ電車ニ乗ル。

雷門ニテ電車ヲ下リテ、觀音堂ニ向ツテ行ケバ、兩ガハニアマタノ店アリ。勸工場ニ入りタルコ、チス。仁王門ヲ入りテ、觀音堂ヲ拜シ、ソレヨリ水族館ヲ見ル。淺草公園ニハ種々ノ見セ物アリ。コ、ヲ一メグリシテ隅田



川ノホトリニ出ヅ。川ノ向フガハハ向島ニテ、櫻ノ名所ナリ。廣キ東京ノ見物ハ一日ニテハツクシガタシ。第十七 東京見物 (二) 今日ハマヅ丸ノ内ニ行キテ宮城ヲ拜シ奉ル。宮城ノ御堀ニハ、カネテ寫真ニテ見知りタル二重橋カ、レリ。宮城ノ前ノ廣場ニハ楠木正成ノ銅像アリ。櫻田門ヲ出ヅレバ、日比谷公園アリ。コノ公園



ハ新シクシテ古木多カ  
ラザレド種々ノ草花ウ  
ルハシク咲キミダレタ  
リコ、ニハ美シキ池ア  
リ。廣キ運動場モアリ。

公園ヲ出ヅレバ海軍省ヲハジメ多クノ官省  
アリ。イツレモ洋風ノレングワヅクリニテリ  
ツパナリ。

電車ニテ九段坂ノ上ニイタリ靖國神社ニサ

ンケイス。社ノカタハラニ遊就館<sup>イウシウ</sup>アリ。カヘリ  
道ニ坂ノ上ヨリ見下セバコ、モマタ見渡ス  
カギリ、人家ナラザルハナシ。  
明日ハ芝公園ヲ見テソレヨリ四十七士ノ墓  
ニマウデントス。

第十八 犬

犬の種類はすこぶる多し。大なるは小馬の如  
く、小なるは猫よりも小さし。あばら骨の數へ  
らるゝ程やせ細りたるものあり。あるく時肉

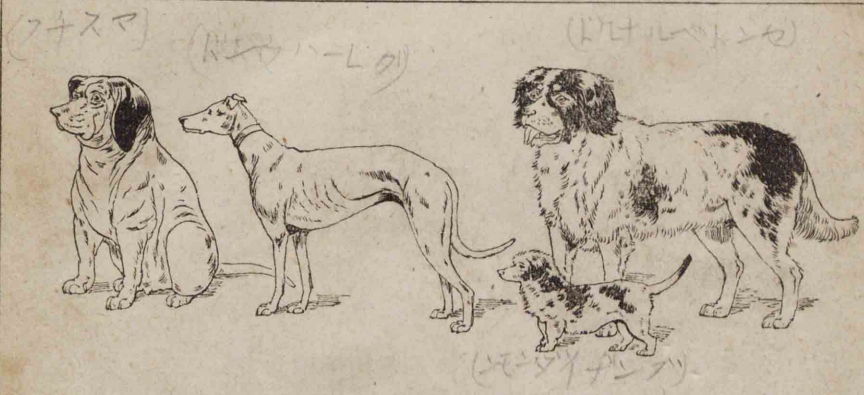


命



びたるもの、たれたるもの、まき  
 たるもの、足の短きもの、長きも  
 のなど、一々數へがたし。  
 すべて犬は人になれ易く、かし  
 こくして、よく主人の命を守る。  
 昔より「犬は三日かへば、三年そ  
 の恩をわすれず」といへり。  
 犬は耳ざとき動物にして、眠れ  
 る時も人の足音を聞けば、たゞ

尾 狐 羊 短



のゆれ動く程こえ太りたるも  
 のあり。毛のいたつて短きもの  
 は指さきにてもつまめぬ程な  
 れど、長きものは羊の如く、立ち  
 てもその毛はなほ地面に達す。  
 あるものは頭大きくまるくし  
 て、しゝの如く、あるものは顔長  
 くとがりて、狐の如し。耳のたれ  
 たるもの、立ちたるもの、尾のの

鼻

適

頭

數

ちに目をさます。されば夜を守らしむるによ  
ろし。又その鼻はよく物のにほひをかぎ分く  
るをもつて、かりに用ひて、えものをさがさし  
むるに適す。

外國にては、犬をして牛かひ羊かひの手つだ  
ひをなさしむ。二三匹の犬、よく二三百頭の牛、  
二三千頭の羊を追ひまはして、主人の行く方  
へ行かしむといふ。又寒き國にては、犬をして  
そりを引かしむ。八九頭の犬いきほひよく數

旅 藥

人を乗せたるそりを引きて、雪の道を走り行  
くさま、まことにいさまし。

ある山國にては、犬のくびに藥品・食物などを  
入れたるかごをかけおきて、つかれたる旅人  
をすくはしむることあり。又近ごろは戰場に  
も犬を用ひて、たふれたる兵士をさがさしむ  
といふ。

第十九 水とからだ

われくは一日も水を飲まないことはない。

水を飲まないことはあつても、水のまじつた物や、水をまぜてこしらへた物を口に入れな  
いことはない。

ゆ茶汁すひ物はいふまでもない。酒やすや醬油も、めしやもちやくわしも、水がなければ出来ない。くだ物も水をふくんで居り、やさいにも水けがある。

われくは毎朝顔を洗ひ、口をすぐ。又時々湯にはいる。時々湯にはいらないと、からだか

きたなくなる。きたなくなると、病氣にかゝり易い。又冷水浴や海水浴はひふを強くし、したがつてからだを強くし、心をさわやかにする。このやうに水はわれくの生活にもつとも大切なもので、水がなければ生きてゐることは出来ない。けれども水をたくさん飲みすぎたり、冷い水の中に長くはいつてゐたりするのはどくである。又きたない水やくさつた水を飲むと、おそろしい病氣にかゝることがあ

桃

る。よく氣を附けなければならぬ。

第二十 桃をおくる手紙

桃がじゆくしましたから、少しばかりですが、差上げます。一昨年つぎ木をしたわか木に、もうこんなに大きなのがなつたのでございます。いつしよについだ梨の木の方は、今年はまだ實がなりません。もとからある分

梨

來

にくらべると、實も大きく、味もよほどよろしうございます。父はこんなちがふものなら、やしき中の桃の木に皆つぎ木をすると申してゐます。一そう手入をして、來年はたくさんならせて、たくさん差上げたいと思つて居ります。

佐

九月一日

佐藤真一

村田新太郎様

同じくへんじ

見事な桃をたくさんおおくり  
下さいまして、有りがたう存じ  
ます。さつそくいただきました  
が、味は又かくべつでございま  
す。母はこんな美しい大きな桃  
は、はじめて見たと申して、おと  
なりへもおすそ分けをいたし

植 参

外

ました。いづれも大よろこびで、  
こんな見事な桃がなるのなら、  
植ゑて見たいと申して居りま  
す。その内参上してお禮を申し  
上げます。

九月二日

村田新太郎

佐藤真一様

第二十一

海ノ生物

(一)

海ノ中ニハ魚ヤ貝ヤソノ外色々ノ動物ガ居

植 魚 表

リ、サマヅノ植物モアル。  
魚類ニハイワシアチサバ  
マグロカツヲナドノヤウ  
ニ、水ノ表面ニ近イ所ヲオ  
ヨグモノガアリ、タヒボラ  
ハモコチキスナドノヤウ  
ニ、岩ノカゲヤ海草ノ間ヲ  
オヨグモノガアリ、エヒカ  
レヒヒラメナドノヤウニ、



尋七

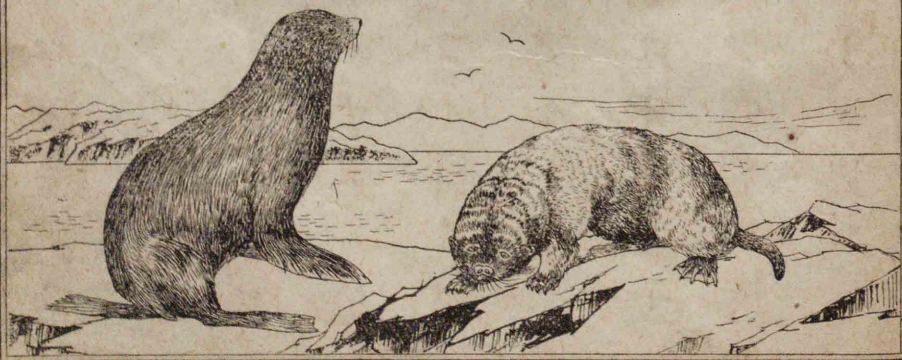
沈 横 様子 泥 面

ソコノ砂地ニ沈ンデキルモノモアル。  
魚類ノ外ニ、エビカニタクオイカナドガスンデ  
キル。エビノピンノハネタリ、カニノ横ニハ  
ツテアルク様子ハ、池ヤ川ニスムモノトチガ  
ハナイガ、タクヤイカノアシヲソロヘテオヨ  
グ様ハマコトニ面白イ。  
アサリハマグリナドハ砂ヤ泥ノ上ニ居リ、サ  
ザエカキナドハ岩ニツイテキル。カキハスグ  
ニフエルモノデ、物ニツケバ、中々ハナレナイ。



軍カンヤ汽船ハ時々カキヲカ  
 キオトサナケレバナラナイ程  
 デアル。又眞珠貝トイフモノガ  
 アル。指ワヤエリドメナドニハ  
 メル美シイ眞珠ハ、コノ貝ノカ  
 ラノ中ニアルノデアアル。  
 蟲類モタクサン居ル。中デオモ  
 シロイノハサンゴデ、タクサン集ツテ、木ノ枝  
 ノ様ナ形ヲシテキル。カンザシノ玉ヤヲジメ

ニスルサンゴハコノ蟲ノ骨デア  
 アル。又物ヲ洗ツタリフイタリ  
 スル時ニ使フ海綿モ、ヤハリ海  
 ノソコノ岩ナドニ取リツイテ  
 キル蟲ノ骨デアアル。  
 海ニハ又ケモノノガスンデキル。  
 陸ノケモノノニニタモノニハ、ラ  
 ツコヲツトセイナドガアリ、魚  
 ニ似タモノニハ、鯨ガアル。鯨ハ



カラダガハナハダ大キイ。陸ニスムモノデハ、  
象ガマヅ一番大キイガ、鯨ニクラベルト、大人  
ト赤子ヨリモ、モツトチガフ。

第二十二 海ノ生物 (二)

海ノ深イ所ハ何千ヒロモアル。コンナ所ニハ  
動物モゴクマレデ、植物ハマツクナイガ、岸  
ニ近イ浅イ所カラ五十ヒログラキノ所マデ  
ニハ、海草ガハエテキル。  
海草ニモ色々アル。マヅタベラレルモノニハ、

コンブウカメアラメヒジキノリモヅクナド  
ガアリ、ノリニスルモノニハ、フノリツノマタ、  
トコロテンニスルモノニハ、テングサガアル。  
コノ他マダタクサンアルガ、  
イヅレモヨイ肥料ニナル。  
海草ノ形ハ様々デアアル。オビ  
ノ様ニ廣クテ長イノモアレ  
バ、ゼンタイガ細カニ分レテ、  
枝ノ様ニナツテキルノモア





緑

紅

ル。又ニハトリノ尾ニ似タノモアルシ、ウチハナリノモアル。

色モ一様デハナイ。ミルヤモヅクノ様ニ綠色ノモノモアレバ、コンブヤアラメノヤウニ茶色ノモノモアリ、テングサノヤウニ紅色ノモノモアル。一ガイニイフコトハ出来ナイガ、マヅ綠色ノモノハ淺イ所ニ、紅色ノモノハ深イ所ニ、茶色ノモノハソノ中間ニハエテキルノデアアル。

根

莖

浮

海草ハ大テイ花ガ咲カナイ。根モ陸上ノ植物ノヤウニ養分ヲスヒ取ルタメノモノデハナク、タヅハナレナイヤウニ、岩ナリ石ナリヘクツツクダケノ用ヲナスモノデアアル。海草ハスベテ養分ヲ葉ヤ莖デスヒ取ル。

廣イ海ニハ、コノ通りニ多クノ動物ヤ植物ガアル。波ニユラレテ、色ノ美シイ海草ガヒラヒラト動ク間ヲ、様々ノ魚ヤケモノガ浮イタリ沈ンダリオヨイダリシテキルノハ、陸上デハ

見ルコトノ出来ナイ美シイ景色デアラウ。

第二十三 何事も精神

のきよりおつる雨だれの

たえず休まず打つ時は、

石にも穴をうがつなり。

我等は人と生れきて、

一たん心定めては、

事に動かず、さそはれず、

はげみ進むに何事の

など成らざらん、鐵石の

かたきもつひにとほすべし。

小さきありもいそしめば、

塔をもきづき、つばめさへ

千里の波を渡るなり。

ましてや人と生れ來て、

一たんめあて定めては、

わき目もふらず、怠らず、

ふるひ進むに何事か

など成らざらんばんじやくの

重きもつひにうつすべし。

第二十四 航海の話 (一)

航 歸 明 治

長き航海を終へて歸り來れる明治丸の船長は、一日その町の學校へまねかれて、航海の話  
をなしたり。

「私も子供の時には毎日この學校へ通つて、皆さんと同じ様に、あの運動場で體操をしたり、この講堂でお話を聞いたりしてゐた

體 操

艦

員

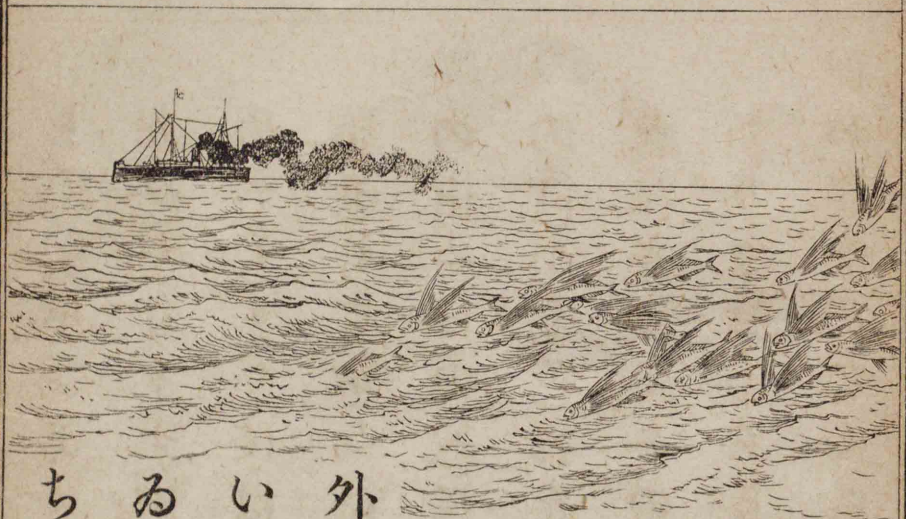
のです。今日このなつかしい學校へ來て、皆さんにお話をするのは、何よりもうれしうございます。私は年中航海をしてゐるものですから、少しそのお話をいたしませう。皆さんは海を御存じでせう。汽船も軍艦も御存じでせう。私の乗つてゐる明治丸といふのは、長さが六十間程もある大きな汽船で、乗組の人員は二百人もあります。まづいかりをぬいて港を出て行くと、立ち

光

萬

ならんである人家も、段々に小さく見える様になります。海岸の松原も次第に遠くなつて、しまひにはもう何も見えなくなります。どちらを向いても青い水ばかりです。日の出や日の入には日光が波にうつつて、水の色が金色になります。月夜には波が銀の様に光つて、その美しさは何とも言ひ様がありません。ある時には鯨が頭から高く水けを吹いてゐることがあります。何萬とも

甲板



知れないいるかがおよいでゐるのを見ることもあります。又ある時にはとび魚が甲板の上へとび上ることもあります。外國の港に着くと、見なれない形の家がならんで立つてゐます。そこに居る人は私たちとはまるでちがつた風を

して、かはつたことばで話してゐます。見るもの聞くもの總べてめづらしいものばかりです。

第二十五 航海の話 (二)

船長はこつぷの水を一口飲み、又その話をつゞけたり。

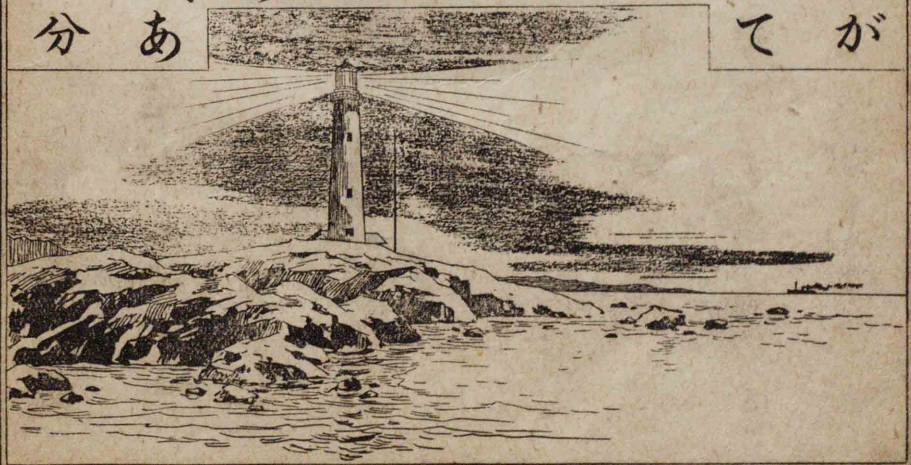
「航海といふものはかういふ面白いものですが、又時にはおそろしい目にあふこともあります。急に暴風雨が来ると、山の様な波

が立つて、船は今にも沈むかと思ふ様になります。しかし船はなか／＼沈むものではありません。又きりがかゝつたり、大雪が降つたりして、一寸先も見えなくなる事もあります。きりや雪で、方角の分らなくなつた時には、悪くすると、浅瀬へ乗上げたり、外の船につきあたつたりする様なまちがひが出来ます。そんな時には海の深さをはかつたり、きてきやかねを鳴らしたりします。船

便

燈臺

にはらしんぎといふものがあつて、それで方角をとつて進んで行くのです。又夜はいくら暗くても、星が出てゐれば、それに便つて、居る場所や方角がちやんと分ります。海岸には燈臺がありますから、それを見ると、あれはどこだといふことが分



ります。この星を見分けることや、燈臺のありかを知ることが、船に乗る者には大切な事です。

聲

恐

船長はかくいひ終へて、一段と聲をはり上げて、

「さておしまひに一ついつておきたい事があります。日本は海國でありながら、海を恐れる人の多いのは残念な事です。ちよつと渡船に乗つてさへ、こはがる者があるでは

ありませんか。海の波を見たばかりで、恐ろしがる人があるではありませんか。たとへば自分のうちを恐ろしがる様なもので、こんなことではどうして海國の國民といはれませう。皆さんの中にも、大きくなつてから外國へ商賣その他の用事で出かける人もありません。又漁業その他海の仕事に出かける人もありません。それですから小さい時から海になれておくやうにしたいも

のです。

第二十六 廣瀬中佐

大砲ノヒビキハ、天モオチ、海モサクルカト思フバカリナリ。

廣瀬中佐ノ乗レル福井丸ハ、今旅順ソコノ港口ニ進ミタリ。爆發ノ聲夕チマチ船ゾコニヒビク。中佐ハシヅカニ、

「杉野ハ今點火ヲ終ヘタルゾ。總員ボートヘ。ボートハヤガテ福井丸ノカタハラニ卸サレ

テ、一同乗リウツレリ。見渡セバ杉野ナシ。中佐ハ心配ゲニ、

「ヨシ、タヅネ來ン。」

ト、タヅネ一人クマナク船内ヲタヅネタレドモ、杉野ノスガタナシ。

「残念ナリ、今一度。」

ト、中佐ハマタモ船内ヲカケメダレリ。

「杉野々々。」

中佐ノスルドキ聲ハ敵ノウチ出ス砲聲ノ中

ニ聞ユ。サレド杉野ハ見アタラズ。

「今一度。」ト、中佐ハ三タビタヅネマハレリ。

「杉野々々。」

船ハ次第ニ沈ミ行キテ、水ハステニ甲板ヲヒタセリ。

「今ハゼヒナシ。」

ト、中佐ハボートニ乗リウツレリ。

四隻ノ船ハ皆爆沈シテ、乗員ハ思ヒくニコギサラントシ、敵ノ砲臺ヨリハ砲丸ヲアビセ



カクルコトイヨノ盛ナリ。中ニモ福井丸ノ  
 ボートニハ敵ノ砲丸雨ノ如クニ降リソ、ゲ  
 リ。ボートハ水ニオツル砲丸ノシブキニ包マ  
 レタリ。中佐ハボートニ坐シテ、ナホモ杉野ヲ  
 ウシナヒタルヲナゲキキタリ。一發ノ砲丸ハ  
 タチマチ中佐ノ身ヲ拂ヘリ。中佐ハ一片ノ肉  
 ヲボートニ殘シテ、海ノ中ニハウムラレタリ。

終

尋七

大正三年九月五日修正印刷  
 大正三年九月八日修正發行  
 大正三年九月十日翻刻印刷  
 大正三年十月十五日翻刻發行

著作權所有

著作兼  
發行者

文 部 省

尋常小學讀本卷七  
 定價金八錢

翻刻發行  
兼印刷者

東京市小石川區久堅町百〇八番地  
 日本書籍株式會社

代表者 大倉保五郎

印刷所  
 東京市小石川區久堅町百〇八番地  
 日本書籍株式會社工場

大正三年九月十五日  
 文部省檢査濟

發賣所

東京市日本橋區新右衛門町十六番地  
 株式會社 國定教科書共同販賣所

